

■23 卒の就活調査 第 2 弾

企業選びの影響要因 / AI 選考についてなど

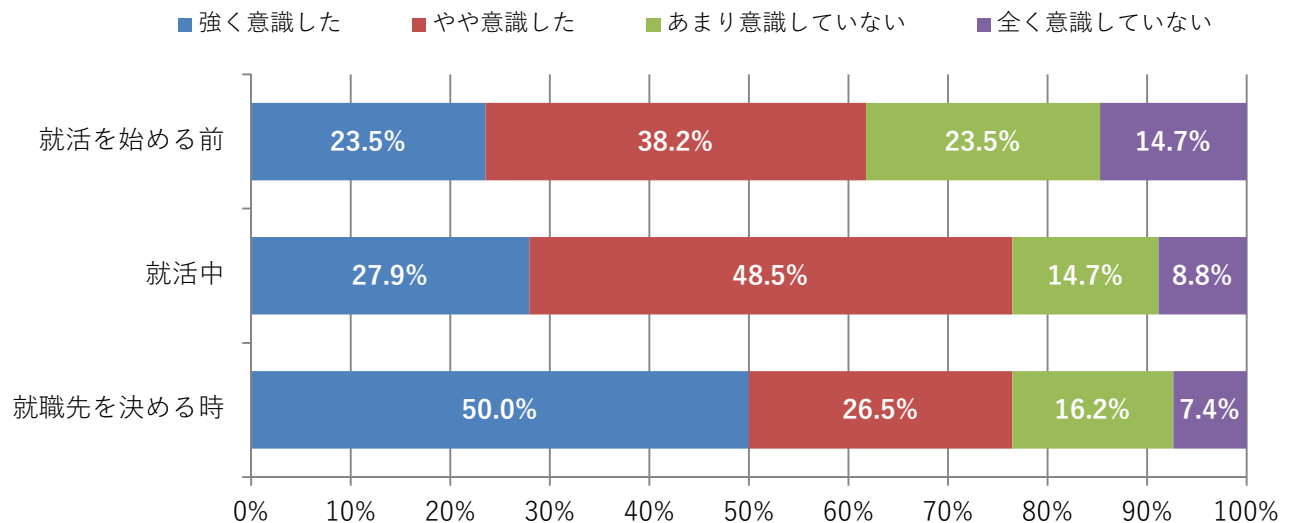
＜調査概要＞

- ・調査対象：ピボット 23 卒レビューアー
- ・回答数：68 件
- ・調査期間：8/15～8/21
- ・調査項目：
 1. 転勤リスクへの意識
 2. 転職への意識
 3. 「ブラック度」への意識
 4. 本選考エントリーに対するインターン選考落選の影響
 5. AI 選考に対する評価

＜調査結果＞

調査結果(1) 転勤リスクへの意識

Q. 就活の際、転勤リスクについてどれくらい意識しましたか？



就職活動の全段階で企業選択に影響をしていますが、入社先の選択時は特に、意思決定の重要な条件となっていることが分かります。

転職リスクを「強く意識」「やや意識した」割合は、「就活前」で6割強、「就職先を決める時」には75%超となり、うち「強く意識」が半数を占めました。

志望業界・企業への影響としては、「転職が多い」などの理由から、金融やメーカー（特に食品など消費財）を回避・辞退した学生も複数見られました。

転職リスクがない外資系 IT 業界とコンサル業界のみ、あるいは関東都市圏の企業に絞ったという学生もいました。

就活の進捗に従い転職リスクへの意識が高まった学生からは、以下のような声が聞かれました。

「金融業界は転職が多いため受けていない」（早慶クラス・文系）

「父親が転職族で、家族と離れて大変そうな様子を間近でみていた。銀行業界はESは出したが、選考は辞退した」（JMARCH クラス・文系）

「メーカーの営業職は転職リスクが大きいので受験をやめた」（旧帝大クラス・文系）

「IT 業界の面接中に、メーカーのマーケティング職を志望している話をしたところ、『マーケティング職なんて一握りだし、行けるかもわからないのにそれまで全国転職で地方行くとか嫌じゃない?』と何気なく言われた」（JMARCH クラス・文系）

「就職活動を始める前は、就職活動の軸を、転職を含めたライフワークバランスよりも、年収やネームバリューに置いていた。しかし、就職活動を重ね入社後の過ごし方がより具体的にイメージできるようになるにつれてできるだけ転職がない企業に就職したいと考えるようになった。その変化により to C の飲料メーカーの受験をやめた」（JMARCH クラス・文系）

「就職活動前から食品業界は転職リスクがあることを承知していた。しかし就活を始めると、転職スパンがおよそ3年程度であることを知り、当初思っていたよりもスパンが短いと感じた」（地方国公立大・理系）

「将来家庭を持った時を想像すると、転職があるとしんどい」（旧帝大クラス・文系）

「親の病気により、将来的な介護の必要性がある」（旧帝大クラス・理系）

「田舎勤務となった場合、すべてのコミュニティが会社で完結することに気づいた」（旧帝大クラス・理系）

「田舎でお金をある程度稼いだとしても、自分にとって有意義なお金の使い道が思いつかなかった。転職がなく、東京に近い場所に勤務できる企業を最終的に見るようになった」（旧帝大クラス・理系）

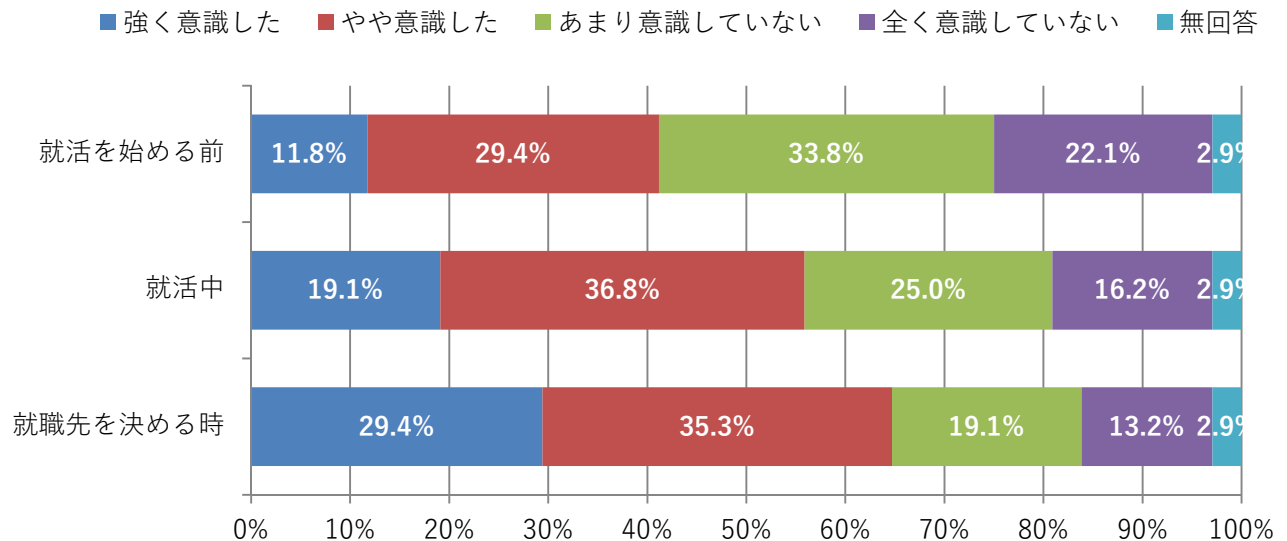
「実家の近くにいたい思いが強くなった。業界は行きたかった業界なので変更はしなかったが、内々定をいただいた会社の中で地域限定の働き方にシフトできる会社に決めた」（地方国公立大クラス・文系）

「海外駐在をしたい。日本では東京か大阪に住んでいたい」（早慶クラス・文系）

「転職も視野に入れているので、入社企業を選択するうえで勤務地に縛られたくないと考えるようになった」（関関同立クラス・文系）

調査結果(2) 転職への意識

Q.就活の際に、転職についてどれくらい意識しましたか？



転職を「強く意識」「やや意識した」割合は、「就活前」では約4割でしたが、就活の進捗とともに意識が高まり、「就職先を決める時」には「強く意識」・「やや意識した」は6割超となりました。

外資コンサルやIT業界など転職の多い業界の志望者は、自身の専門性を磨いてステップアップしていくキャリア志向が見られました。また、自己分析を通じて発見した特定分野への興味を武器としたと考え、「職種別採用」での内定先に決めた学生もいました。

就活が進むにつれて転職への意識が高まった理由としては、以下のような声があがっています。

「就活を通じて、スキルを磨いて転職を通して年収を上げていくという考え方に会った」（早慶クラス・理系）

「仮に就職して仕事や会社が合わないと思ったとき、転職できるスキルが身につくのか疑問で不安を感じたので、転職をふまえた進路を選ぼうと意識し始めた」（JMARCHクラス・文系）

「ライフステージによって適した会社も変わると考えるようになった」（旧帝大クラス・文系）

一方、転職を意識しなかった理由としては、以下のような意見が聞かれました。

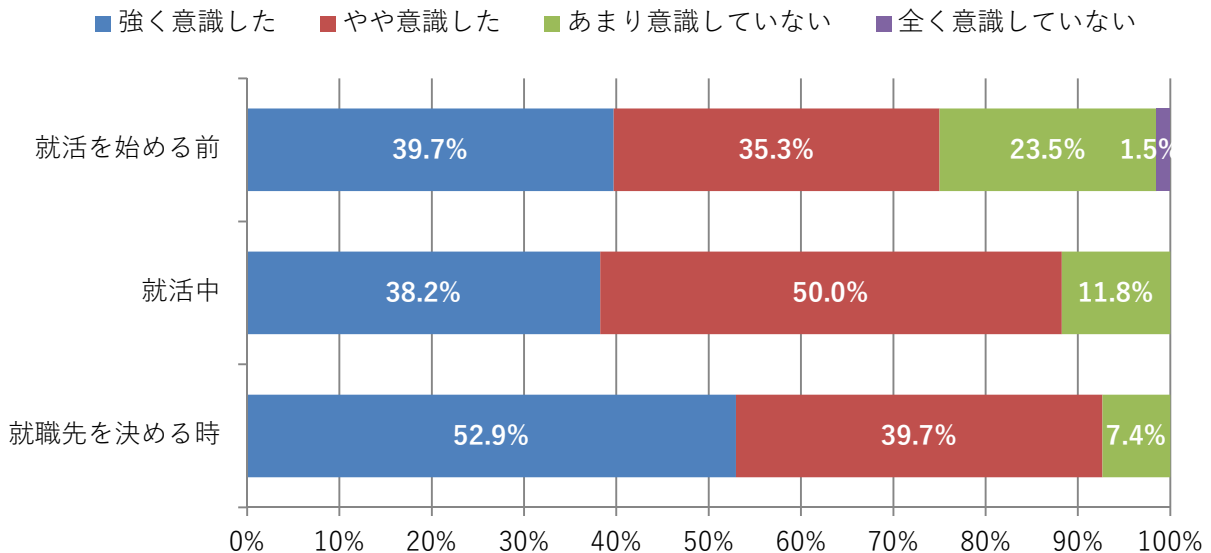
「組織に依存せず自立できる仕事がいいと思っていたが、帰属意識を強く持って尊敬できる仲間たちと長く一つの組織で働きたいと思うようになった」（早慶クラス・文系）

「日本の大企業は長く働くほど給与が安定的に上がって行くという考えが変わらなかった」（旧帝大クラス・文系）

「メーカー志望だったので、終身雇用が前提であるから」（JMARCHクラス・文系）

調査結果(3)「ブラック度」(残業時間、休暇取得や福利厚生などの制度、社風など)への意識

Q. 就活の際に、「ブラック度」(残業時間、休暇取得や福利厚生などの制度、社風など)についてどれくらい意識しましたか？



企業の「ブラック度」を「強く意識」・「やや意識した」割合は、「就活前」でも75%に上りました。「就職先を決める時」には90%を超え、しかも「強く意識した」が過半数を占めています。転勤リスクや転職への意識に比べ、就活を通じた意識変化が少ないのも特徴的です。今回質問した「転勤リスク」「転職への意識」「ブラック度」の中では、ブラック度の影響が最も大きいことが分かります。

また、「ブラック度」に対する学生の意見は以下のとおりです。

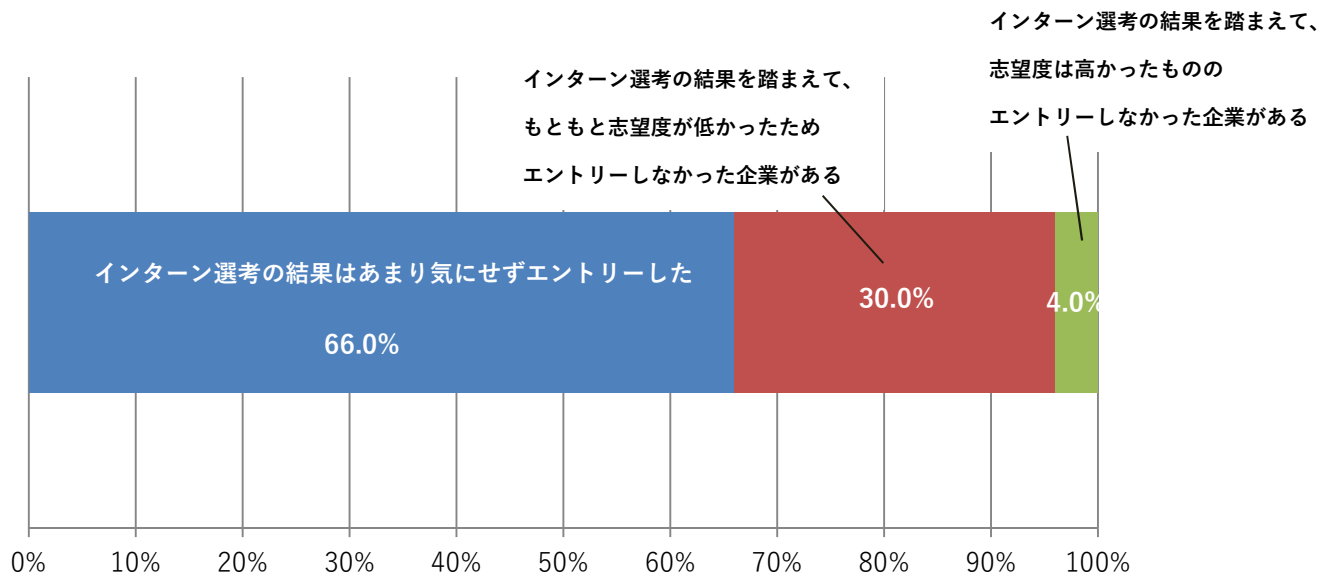
「自分が働く姿をより具体的に想像していく中で激務に何十年も耐えられないと思い始めた」(早慶クラス・理系)

「働きやすい環境がいいと思ったが、就活中は内定を得るのを最優先にしていたためあまり意識していなかった。入社先を選ぶ際、より働きやすいほうを選んだ」(早慶クラス・文系)

「就活前はある程度の規模感の会社であればブラック度は低いと考えていたが、就活を始めて業界によっては規模が大きくてもブラック度の高い会社があることを知り、意識が変化した」(地方国公立大クラス・理系)

調査結果(4) 本選考エントリーに対するインターン選考落選の影響

Q. (インターン選考に落選したことがあると回答した方のみ) インターン選考に落選した後、その企業の本選考にエントリーしましたか？



「インターン落選後、その企業の本選考にエントリーした」のは66%、一方、30%は「志望度が低かった企業についてはエントリーしなかった企業がある」と回答。「志望度が高かったもののエントリーしなかった企業がある」は4%とごく少数でした。

本エントリーをしなかった学生に対し、「どのような施策があればインターン選考落選後もその企業の本選考にエントリーしたか」を質問したところ、以下のような声が聞かれました。

「本選考への影響が全くないという保証、ESの免除（インターンエントリー時に提出したESに基づく面接）」(JMARCHクラス・文系)

「Webテスト免除。選考のたびに同一企業で同じテストをいちいち受けなおすのは時間の無駄だと感じる」(旧帝大クラス・理系)

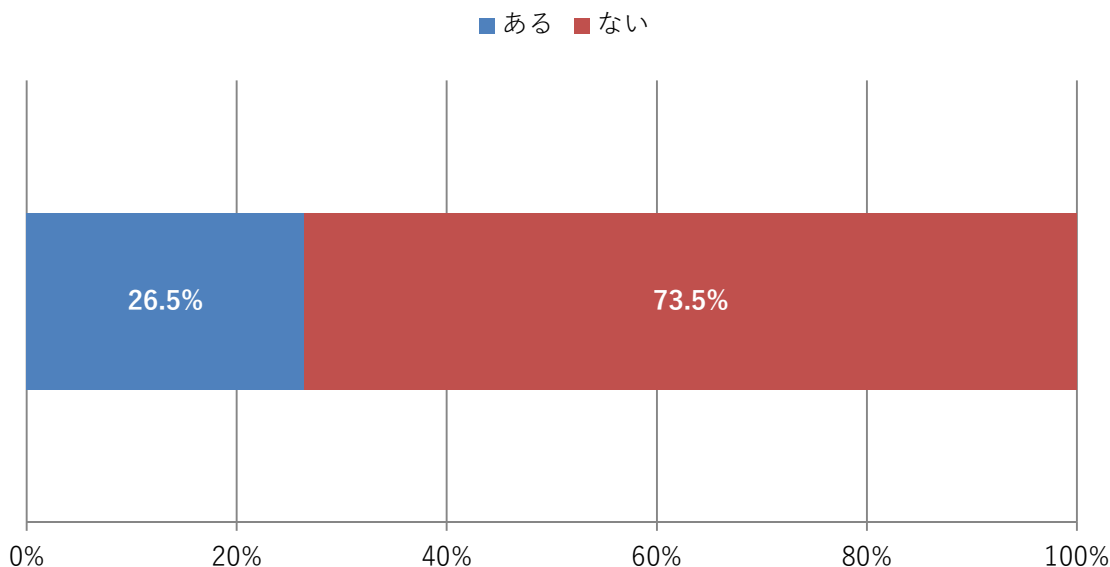
「インターンに応募したことに対する感謝のメールや、有利に選考をすすめることが出来るなど特典」(旧帝大クラス・理系)

「応募者限定の座談会など」(早慶クラス・文系)

「インターンで落とした理由を教えてください」(早慶クラス・理系)

調査結果(5) AI 選考について

Q. インターン選考または本選考において AI を用いた選考を経験されましたか？



インターン選考または本選考で AI 選考を経験した割合は、3 割弱にとどまりました。

AI 選考を経験した学生に、内容と評価を尋ねました。

<ケース紹介>

▼伊藤忠商事

選考内容：録画面接（HireVue）

「質問数が多かったので疲れたが、落ち着いてかつ集中して取り組めば問題なく通過できると感じた」

▼農林中央金庫

選考内容：AI 面接（SHaiN）

「質問が支離滅裂でやりにくかった」

「似たような設問が繰り返された印象だった」

「想像以上にガクチカの深掘りが長く、答えに詰まってしまう、曖昧に答えると繰り返し同じ質問をされた。企業側は手間だと思うが、表情が見える本物の面接官の方がやりやすく感じた」

「内容はとても難しいものの、ほとんどの人が受かっていたため、結局人が面接した方が手っ取り早いのではないか」

▼ユニ・チャーム

選考内容：録画面接（HireVue）

「何を見られているのかよくわからない」

▼ソフトバンク

選考内容：録画面接（エクサウィザーズ）

「選考基準が不明瞭であり、正しく審査されていないのではないかと思ひ不安であった」

▼ヤフー

選考内容：録画面接

「質問の精度が低く同じことを何度も言った記憶がある」

「使い方に慣れておらず、本来の力を出しきれなかった」